2　春過ぎて　夏来にけらし　白妙の　衣ほすてふ　天の香具山　　持統天皇

〈声に出してよんでみよう〉

ハルスギテ　ナツキニケラシ

シロタエノ　コロモホスチョー　アマノカグヤマ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]

＊「エ段の音＋う／ふ」は、「ヨー」（前に子音がある場合には「ョー」）とよみます。したがって、「けふ」は「キョー（今日）」、「てふてふ」は「チョーチョー（蝶々）」とよむことになります。[2]



http://www.welove-kashihara.jp/index.html

〈どんな意味だろう〉

春が過ぎて、夏が来たらしい。

（夏に着る）真っ白な衣服を干すと言う、天の香具山に、（白い衣服が干してあるよ）。

＊第２句「夏来にけらし」の最後の「らし」は、現代語の「らしい」と同じく、推定を表します。この「らし」は終止形[3]なので、この歌は第２句が文末で、ここで切れ

ることになります。このような歌の構造を「２句切れ」と言います。２句切れの歌のリズムは、「５・７」「５・７・７」となりますね。つまり、これは「５・７」のリズムを基本とする「五七調」の歌であるということになります。五七調は、現存する最古の歌集である『万葉集』（奈良時代・８世紀頃成立）の基本のリズムです。[4]

＊「てふ」は、「といふ」の縮約された形です。

〈解説〉

７世紀頃、都は飛鳥地方（現在の奈良県明日香村周辺）に置かれていました。この時代を、飛鳥時代と呼びます。

飛鳥は、丘のような小高い山に囲まれたところです。主な山は、畝傍山(199m)・耳成山(140m)・香具山(152m)の３つで、あわせて「大和三山」と呼ばれます（大和とは、現在の奈良県です）。中でも、香具山は天から下って来たという伝承があり、「天の」を冠して呼ばれます。

山の新緑と真っ白な衣の色彩のコントラストが鮮やかで、初夏のすがすがしさ・さわやかさを感じさせてくれる歌として、多くの人に愛されている一首です。

〈作者と出典〉

持統天皇（645－702、在位 686－697・第 41 代）は、日本の歴史上、８人・10 代存在した、女性天皇の１人です。父は、天智天皇（→「１秋の田の」）。父の弟である天武天皇の皇后となり、夫の死後、天皇に即位しました。夫とともに、中国の唐の政治制度を日本に取り入れようと努め、法律（「律令」と呼ばれます）を整備したり、藤原京（現在の奈良県橿原市）と呼ばれる都を唐の都の長安（現在の西安）に倣って造営したりしました。

さて、「百人一首」に収められた、この「春過ぎて」の歌は、『新古今和歌集』（13 世

紀頃成立）を出典としています。

『万葉集』には、次のような形で載(の)っています。

春過ぎて　夏来たるらし　白妙の　衣ほしたり　天の香具山

（春が過ぎて、夏が来たらしい。真っ白な衣が干してある。天の香具山に。）

『万葉集』と『新古今集』・『百人一首』で、大きく異なるのが第４句です。『万葉集』の「たり」は、完了・存続(そんぞく)を表す助動詞です。ここでは、真っ白な衣が干してある実景を眼にして、詠んでいることになります。一方、『新古今集』・『百人一首』の「てふ」は、「といふ(ユー)」の縮約された形ですので、伝聞です。

古典の時代は、現代のような活字本(かつじぼん)ではなく、記憶(きおく)・口承(こうしょう)・手書きによる筆写(ひっしゃ)などの手段で、文学作品は伝えられていったのでした。ですから、当然、伝承による差異が生じたのです。また、現代のような著作権(ちょさくけん)の概念(がいねん)もありませんでしたから、古くから伝わる作品が伝承の段階でより良い（と思われる）方向に改作される、ということも、普通に行われていたようです。

「春過ぎて」のこの２つの歌の違いを、あなたはどのように受けとめますか？　どちらの方が好きですか？　皆で話し合ってみると、面白いでしょう。

最後に、１つ、クイズです。次の漢字の行列は、一体何と読むのでしょう？

春過而　夏來良之　白妙能　衣乾有　天之香來山

わかりましたか？　答えは、『万葉集』の「春過ぎて」の歌です。

『万葉集』は、奈良時代・８世紀頃の成立です。このころ、かな はまだなく[5]、文字は中国渡来(とらい)の漢字しかありませんでした。そこで、漢字をある時は表意(ひょうい)文字として、またある時は表音(ひょうおん)文字として、自在(じざい)に操(あやつ)り、日本語による歌を表記しようとしたわけです。

このような表記法を、「万葉仮名(まんようがな)」と言います。素晴しい工夫・発明ですね！

[1] ハ行の子音は、8世紀頃に [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。

[2] 二重母音は発音しにくいためです。この変化も11世紀頃のことと考えられています。

[3] 活用形の１つで、文末に用いられる形を「終止形」と言います。

[4]「五七調」に対し、「７・５」を基本とするリズムを「**七五調**」と言います。七五調は、『**古今和歌集**』（平安時代前期・905年頃成立）の時代以降現代に至るまで、日本語の韻文の一般的なリズムとなっています。

[5] かなの成立は、平安時代初期、９世紀頃と推定されています。